

Title

赫視るカラス

The crow gazes at the burning

(読み:かくみる からす)

Introduction

2012年、ある兄弟が雑居ビルで起きた火災に巻き込まれた。兄は重症、弟は記憶を失うも、二人とも幸い一命をとりとめる。
あれは“不幸な事故”だった——と、結論がついてからしばらくの時が経った。

当時火災に巻き込まれたの兄の^{あわだ くる}栗田玄は社会人、弟の^{あわだ てんな}栗田天和は大学4年生となり、現在は二人暮らし。
今では火災での傷もほとんど癒え、平穏に暮らしている。

しかし、この火災には“事故ではない別の真実”が存在し、
兄・玄にはこの一連の出来事によって抱えてしまった“大きな秘密”があった。

15年の時を経て、兄弟は再び火災について調べることに。
抱え込んでしまった秘密と向き合うことになる玄、その秘密は失われていた天和の記憶に関わることだった。
火災の真実に近づくにつれ、明らかになっていく兄弟の秘密。次第に天和も元の記憶を思い出し——。

この物語は、15年前の火災の真実を追い求める『ヒューマンサスペンス』であり、
15年分の家族の真実を取り戻す『家族ドラマ』である。

——そしてすべてが明らかになった時、彼らにどのような未来が訪れるのか。——

Concept

『間違えてしまった過去の選択』、でも“不正解”じゃない。


シリーズ
構成&
物語概要

Character Chart 人物相関図

株式会社
ケーウェブメディア

やなみ さえり
八南 冴理(31)

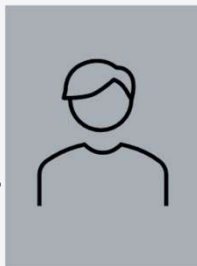
編集第一部・社会班所属。
玄とは就活時からの同期。
周囲からも頼られる性格。
インターンチームの中心的存在。
天和のことを気にかけている。



同期

あわだ くる
栗田 玄(31)

編集第二部・エンタメ班所属。
入社当時は社会班だったが、
本人の希望でエンタメ班に異動。
15年前の火災をきっかけに
大きな秘密を抱えている。



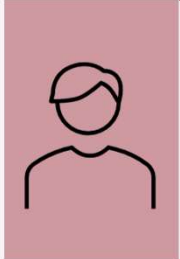
母親違いの弟

近所のお兄さんの存在
勉強の面倒を見ていた

15年前
雑居ビル火災
関係者

かねむら たすく
金村 祐(35)

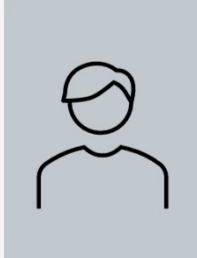
悠由医科大学病院・内科医。
玄と天和と地元が同じ。
医大生時代、当時高校生の玄の
家庭教師をしていた。
15年前の火災の真犯人。



15年前の火災で入れ替わる

あわだ てんな
栗田 天和(21)


宝旺大学4年。
インターン生としてケーウェブ
メディアにやってくる。
15年前の火災で当時の
記憶を失っている。



母親違いの兄

ワンラン
王然(22)


玄の前に突然『ルイ』と
名乗り現れる。
幼かったころに、ルイと共に
過ごした在留中国人二世。



幼い頃の友人

しき ゆうま
志岐 悠馬(33)


玄の就活同期。
フリージャーナリスト。
ケーウェブとの付き合いも長い。
玄とは仕事の話も
プライベートの話もできる仲。



就活時代の同期

ルイ(21)

玄と天和が暮らしていた地域に
住んでいた在留中国人二世。
天和とよく一緒に居るようになる。



本当の名前/本来の姿・正体

【全体構成】

第1話「ハッピーバースデー」

15年前、足立区で発生した『足立区城山ビル火災』。大きな被害を残したその雑居ビル火災に巻き込まれた二人の兄弟がいた。火災発生時にビルの中に取り残されてしまった当時6歳の栗田天和、そして天和のことを助けに入った当時16歳の栗田玄。玄は幼い天和を抱え、なんとかビルから脱出し、幸い2人とも一命を取り留めた。

時はたち2027年、兄の玄は31歳、弟の天和は21歳、現在二人暮らしをしている。ある日、兄の玄が勤めるウェブニュース運営会社にインターン生として弟の天和がやってきた。天和から何も知らされておらず、突然の出来事に驚く玄。しかし、天和が玄にインターンのことを話さなかったのには理由があった。——それは、天和が一度事故として処理された『足立区城山ビル火災』について、インターン中に再調査しようとしていたからだった。その事実を知った玄は、不自然なほど必死に天和を引き留める。

あの火災で、火災以前の記憶を失ってしまっている天和。精神的なショックも相まって記憶が失われているため、確かに火災について調べることで天和が当時の記憶を取り戻してしまう可能性があるのは心配も大きい。しかし、他にも玄が天和の再調査を引き留める原因があるのではないかと同僚の八南冴理は感じていた。冴理は天和の意思も尊重してもいいのではと玄に告げ、そして再び天和と話をした玄。玄は天和が火災の真実を追うことを認めた。そんな矢先、雨の日の夜道、天和が階段から転落し救急搬送される。

搬送先の病院に到着する玄。病室のベッドの上で眠る天和に呼びかける。そして天和は玄の声に反応し目を覚ます……が、その様子がいつもと違った。普段「玄」と名前では呼んでいるはずの天和が「お兄ちゃん」と呼んだのだ。——その瞬間、玄は15年前の火災の中で見た光景を思い出す。そこには天和とは別に、もう1人の少年がいたのだ。

第2話「『事件性無しに隠された真実』」

目を覚ますとまるでいつもと別人のような様子だった天和。しかし、玄が医師を呼びに行ってる間に再び眠ってしまい、朝目を覚ますいつもの天和に戻っていた。玄は病院内で偶然再会した金村佑にこのことを話すと、佑は一度記憶喪失を経験していると、少しの衝撃で一時的に記憶を失うことがあると玄に説明した。そして天和は程なく退院する。

天和が階段から転落し搬送された夜、その直前まで玄は就活同期でフリージャーナリストの志岐悠馬に会っていた。——玄がケーウェブメディアに入社した9年前、当時は本人の希望で社会班に配属されていた頃。玄自身も、過去に火災の真実について調べようとしていた時期があったのだ。玄と志岐が2人で火災について調べていたあるとき、手に入れた現場の残留物の写真の中に、金属製の溶けたフィギュアのようなものが映っているのを見つける。玄は、それがタバコを吸う父親がお土産として誰かからもらった“龍をあしらった金属製のライター”と気づく。そしてそれは、天和がおもちゃだと勘違いしたことがあった物だった。——もしかしたら、火災の原因はこのライターなのかもしれない。そう思った玄は、火災についてこれ以上追求することをやめ、一緒に調査を手伝ってもらっていた志岐にも理由を明かさず、一言「もう調べなくていい」と伝えていたのだった。

当時、自分に調べることをやめさせた理由が弟の天和にあると感じていた志岐。しかし、志岐自身もあの火災には事故以外の真実があると考えており、玄から止められた後も少し調べ続けていたのだ。そしてあの火災の火災報告書に“不自然な更新“があり、どこかに『本来の火災報告書』があるということを突き止め、その事実こそがどこかに真犯人がいる証拠だと伝えた。退院後インターンに合流した天和に、玄は意を決し残留物の中のライターの存在を伝え、志岐と共にインターンに協力することに。天和は加納翔也(かのうしょうや・男・21才)と牧野実花(まきのみか・女・22才)とチームを組み“過去に『事件性無し』と言われていたが、のちに事件性が発覚した例“を集めて記事にすることにした。

第3話 「記憶の断片」

天和の快気祝いに9人のインターン生は食事会・飲み会を開いた。会が終わり店を出た後、天和は忘れ物に気づいて振り返り、ふと店のあった建物2階を見上げる。その瞬間、今まで全く思い出すことのなかった火災前の幼少期の記憶の一部が蘇る。“あの日”も同じように、一度建物の外に出たのに、理由があって再びビルの中に入って行ったような気がする、と。あの時天和がビルに戻ったのはただの忘れ物だったのか。

一方で志岐は7年前に断念してしまった『本来の火災報告書』をようやくの思いで探し当てる。今の報告書と違う点は、本来の報告書には“不審な男の目撃証言”が存在したこと。もう一つは壁内配線の不良が起きた“出火元”とされている場所が異なっていたことだった。

志岐から火災報告書の書き換えに関与している可能性がある人物として、当時のビル管理責任者だった保坂幸成（ほさかゆきなり・男・45才）の名前を聞く玄。玄と志岐は保坂に話を聞きに行くことにした。だが、保坂は目の前に現れた玄の顔を見た瞬間に逃げ出してしまう。保坂をとらえ話を聞くと、玄の顔を見て火災の件について聞かれると察したらしい。玄は火災直後、現場によく足を運んでおり、それを保坂は見ていたのだ。そして最近になって火災のことを尋ねてきた人物が他にも居たため、警察が動いていると勘違いして逃げ出してしまったと説明する。保坂は報告書を書き直した事実についてはあっさり認めるが、「その後の調査で分かったことによる修正」と会社に言われただけで、特に大きな意味があるとは考えていなかったようだった。そして玄・志岐・天和の3人は、もう1人、火災が起きたビルに入っていた子どもセンターの当時の職員・吉岡美代子（よしおかみよこ・女・56才）に話を聞きに向かう。

第4話 「かくれんぼ」

15年前、卒業・卒園シーズンだったその日は子供センターでお祝いの縁日が開かれていた。火災があったのはちょうどその片付けも終わるくらいの時間帯。美代子がゴミ出しをしようと思って部屋を出たところで爆発音が鳴り、一気に火が回ったという。この時、天和が中に残っていることに美代子は気づいていなかった。外に出た時、その場にいた天和の母が『天和が中にいる』と泣き叫ぶのを見て、美代子はそれを理解したのだ。玄と天和は異母兄弟で、玄は父親の連れ子。母親にとって、実の息子である天和が火事に巻き込まれたのは相当なショックだった。元々身体が強くなく、精神的ショックもあった母親は入退院を繰り返すようになり、今も入院中で時々天和が見舞いに行っていた。

また、本来の報告書に書かれていた“不審な男の目撃証言”は美代子のものだったのだ。当時、美代子はビルから逃げ出した後、野次馬の中に目深くフードを被った若い男を目撃するも、男は美代子が自分を見ていることに気づくと慌てて去っていったらしい。不審な男の目撃証言が消えてしまった理由には美代子自身も見当がつかないようだった。そして、天和は自分が一度外に出た後にビルに戻った理由、それに美代子が気づかなかった理由に心当たりがあるかと尋ねる。すると美代子は自分にも責任があることとを悔やみながら話を続けた。「あの火事には当時のあなたと同じくらいの子供の犠牲者がいたでしょ。あなたは忘れてしまったのかもしれないけど、もしその子とあなたがお友達だったのなら、子供が考えることであれば『かくれんぼ』のようなことなのではないか」と。そもそも、親の世話が必要な5歳前後の男の子が身元不明のままであるという事実がおかしいことに気づく天和。行方不明届も出されておらず、親もその子供が突然いなくなっても探していないことになるのだ。この男の子は一体誰なのだろうか。

——そして玄は美代子から「天和を助けに行った時、もう1人の男の子を見ていないのか」と尋ねられ、「見ていない」と答えた。

「赫視るカラス」

第1話

【登場人物】

栗田 玄（31）（16）

ケーウェブメディア社員

栗田 天和（21）（6）

宝旺大学4年・玄の弟

八南 冴理（31）玄の同僚・同期

志岐 悠馬（33）フリージャーナリスト

鈴木 春瀬（22）天和の友人

甲斐 誠一（36）玄の先輩

梅原 桜太郎（24）玄の後輩

真中 由梨（27）ビル併設カフェ店員

報道局員（30）女性

居酒屋店員（25）男性

喫茶店店員（21）女性

看護師（29）女性

少年 A（6）15年前の火災現場にいた少年

○（回想）雑居ビル火災現場・3階（タ）

火に包まれている雑居ビルの建物内。
栗田玄（16）、火の勢いに圧倒され、
姿勢を低くしたまま動けずにいる。
玄の腕の中には意識を失った状態の栗
田天和（6）、炎から玄が守っている。
天井の一部が崩れ落ちてきて、玄が背
中で受ける。玄の背中から血が流れる。

玄「うっ……」

玄、腕の中の天和を見ると、天和の右
腕には大きな傷。血が流れている。
顔を上げ、部屋の出口を確認する玄。
玄、出口までの道がまだあることが分
かるが、部屋の奥の方を気にして切羽
詰まった表情で後ろを振り返る。
その瞬間、玄の目の前に、次々と燃え
た天井の瓦礫が剥がれ落ちてくる。
その様子を絶望の眼差しで見る玄の目。

○（回想）同・外・付近の電線（タ）

電線に停まっているカラスの目、燃えるビルの方を見ている。

○タイトル「赫視るカラス」

○元の栗田家・玄の部屋（朝）

ファミリ―用マンション内の一部屋。
上裸の状態でクローゼットを開き、服を選んでいる栗田玄（31）。

玄の背中には大きな古い傷跡。

玄、シャツを一枚手に取って着る。

隣の部屋からアラームの音が聞こえる。

○同・天和の部屋（朝）

玄の部屋と同程度の広さの部屋。

ベッドのサイドテーブルに置かれたス

マホのアラームが鳴っている。

ベッドで眠っていた栗田天和（21）

が寝ぼけたままスマホに右手を伸ばす。

天和の右前腕には20cmほどの大き

な古い傷跡。

天和、アラームを止め、再び寝落ちる。
スマホ画面には『インターン・会社見
学』とスケジュールが表示されている。

○同・リビング（朝）

カウンター型のキッチンがつながった、
実家感のあるリビングダイニング。
ベランダがついている。

テレビからは朝の情報番組が流れる。
玄、テレビを見ながら、アイスコーヒ
ーを一口飲み、グラスをダイニングテ
ーブルに置いて立ち去る。

○同・洗面所（朝）

洗濯機から洗濯物を取り出す玄。
眠そうな部屋着姿の天和が、洗面所の
横を通り過ぎる。

天和「おはよう」

玄「おはよ」

○同・ベランダ（朝）

洗濯物を干している玄。

リビングから玄に話しかける天和の声。

天和の声「玄、パン焼く？」

ベランダから、キッチンで食パンの袋

を開けている天和の姿が見える。

玄、振り返り答える。

玄「いない」

玄、再び洗濯物を干し始めると、どこ

からか消防車のサイレンが聞こえる。

サイレンの音の方を気にする玄。

○同・リビング（朝）

トーストの乗った皿を持ってダイニン

グテーブルまでやってくる天和。椅子

に座り、トーストを食べ始める。

玄、洗濯物が干し終わり、ベランダか

ら室内に入る。

テレビから流れていた朝の情報番組が
報道局中継に切り替わる。

テレビに映る報道局員（30）。

報道局員の声「今日午前7時ごろ、東京都江

戸川区の雑居ビルで火災が発生しました」

玄がピタッと足を止める。

天和も咀嚼を止める。

同時にテレビ画面に注目する玄と天和。

報道局員の声「現在も消防による消火活動が

続いています。現場近くに、」

テレビ画面、報道が続く。

テレビに見入っている玄と天和。

テーブル上のスマホに着信が入る。

天和、着信に気付き、玄を呼ぶ。

天和「玄」

玄、テレビに気を取られていて天和の
声に気づかない。

玄の頭の中で、テレビからの消防車の
サイレンの音と、マンションの外から
聞こえるサイレンの音が大きく反響し
ている。

天和「……玄！」

玄、我に帰り天和の方を振り向く。

玄「ん？」

天和「電話鳴ってる」

玄「ああ」

スマホを手に取り電話に出る玄。

廊下の奥へ歩いていく玄を見る天和。

○同・洗面所（朝）

スーツ姿の天和、鏡の前で髪を整える。

玄がやってきて洗面所を覗く。

玄「天和」

天和が玄を見る。

玄「父さんの七回忌の日、仕事無くなったわ」

天和「じゃ一緒にお墓参り行ける？」

玄「うん、駅から遠いし車で行こう。さつき

レンタカー予約した」

天和「わかった」

玄、珍しそうにスーツ姿の天和を足先

から上に向かって見ていく。

玄「今日スーツなんだ」

天和「あゝ……、うん」

玄「就活？」

天和、はぐらかすように。

天和「……まあそんな感じ？」

玄、天和の曖昧な返答にひっかかり。

玄「……『そんな感じ』？」

天和、面倒そうに答える。

天和「就活就活」

玄「ふうん、じゃあ出るわ」

天和「うん」

玄が立ち去り、ふうと安心した表情を

浮かべる天和。

少しして再び玄が洗面所を覗く。

驚いてビクツとする天和。

天和「何？」

玄「ネクタイ曲がってるからやり直した方が

いいよ」

天和「……わかった」

立ち去る玄。

天和「……行ったらっしやい」

○オフィスビル・エントランス

20階建のオフィスビルエントランス。
続々とビルに入る会社員の中に玄の姿。
ゲートに社員証をかざし通過する玄。
ビル案内板の5・6階の欄に『ケーウ
エブメディア株式会社』と書いてある。

○ケーウエブメディア・編集第二部

カラフルでおしゃれな雰囲気フロア。
天井から『エンタメ班』と書かれたプ
レートが下がっている。
玄が自分のデスクにやってくる。

玄「おはようございます」

× × ×

プリンターから書類が出てきている。
プリンターの前で印刷が終わるのを待
っている玄、ポケットにあるスマホの
通知が鳴り、スマホを取り出す。

玄の背後から手に書類を持った梅原桜
太郎（24）が玄のスマホを覗く。

スマホにはスポーツブランドの通販サイト
の画面と『発送完了』の文字。

梅原「何買ったんですか？」

玄「キャップ。弟の誕生日にと思って」

印刷が終わり、プリンターから書類を
取り出す玄、自分の席に向かう。

梅原も後ろを続く。

梅原「いいじゃないですか。栗田さんって
弟さんと結構離れてるんですけど？」

玄「10個差、今年22歳」

梅原「歳の離れた弟って可愛いんでしょうね
。僕双子なんで小さい時から喧嘩ばっか

りで……」

玄「へえ。双子なんだ」

梅原「いいなあ兄貴とか欲しかったなあ、勉
強教えてもらえたりするじゃないですか」

玄「勉強とかはあんまり教えた覚えはないけど」

自分の席に座る玄。印刷した資料を確
認しながら呟く。

玄「今就活中なんだって。（少し文句っぽく）

状況とか全然言ってこないからわかんない
んだよねゝゝゝ本当、どうなるんだか」

玄の斜め向かいの自分の席の前に立っている梅原。

梅原「そうなんですねゝゝゝ」

梅原、何かを思い出して。

梅原「あれ？」

玄、顔を上げる。

梅原、手元の資料をパラパラとめくる。

玄「何？」

梅原「就活中ってゝゝゝもしかして」

○オフィスビル・エレベーター内

鏡でネクタイを整えている天和。

扉が開きエレベーターを降りる天和。

○ケーウェブメディア・エントランス

『ケーウェブメディア』と大きく書か

れた受付カウンターに向かう天和。

天和、受付社員に話しかけようとする。

○同・編集第二部

玄、席に座り、書類をパラパラとめくっている梅原を見ている。

梅原「いや、気のせいかな……？」

フロアの奥の方から甲斐誠一（36）が玄を呼ぶ。

甲斐「栗田ー」

甲斐の呼ぶ方を見る玄。

玄「はい」

甲斐「少し早いけど会議始めよう」

玄「はい」

玄、立ち上がる。

玄「行ってくるわ」

玄、印刷した書類を持って立ち去る。

取り残される梅原。立ち去る玄の背中に向かって。

梅原「いつてらっしゃーい……」

梅原が手元の書類に目を落とす。

書類の中には、天和の証明写真が貼られた履歴書。

梅原「え、……やっぱりこれって……」

○同・廊下

歩いてやってくる天和の足元。

反対側から資料に目を落としつつ早足

で歩いている玄、パツと顔を上げると、

目の前に天和が歩いてくるのが見える。

玄と天和の目が合う。

玄「え？」

やばい、という表情の天和。

天和「あ……」

言葉が出ず、見合っている玄と天和。

玄「え！？」

天和「これは、あの……その……」

玄、じわじわと天和に近づく。

玄「……え、何ということ？」

後退りしていく天和。

天和「なんというか……」

通り過ぎる社員たちが、不審そうに玄と天和を見る。

玄「なんで俺の会社にいるの？」

天和「……いや」

玄、他の社員たちに見られていることに気づき、天和の手首を掴む。

玄「ちよっと」

天和の手首をぐいと引っ張る玄。

○同・休憩室

玄、休憩室の端に天和を立たせる。

玄「説明して」

怯えたような上目遣いで玄を見る天和。

天和「イ、インターンが、ありまして……」

玄「インターン？」

天和「早期採用者の、インターン」

玄「早期採用者……」

考えを巡らせている玄。

それをじっと見ている天和。

玄「……天和ここで就職決まったってこと？」

天和「厳密に言うところではないけど……」

再び考えを巡らせている玄。

玄を見る天和。

休憩室にやってくる八南冴理（31）。

冴理、天和を見て。

冴理「あ！居たゝよかった」

冴理、玄を見て訝しげに。

冴理「栗田何してんの？」

玄「八南こそ何してんの？」

冴理「インターンの子が社員にどっか連れて
かれるの見たって聞いて来たんだけど……」

冴理、玄を不審そうな目で見る。

玄、天和を指差して。

玄「……俺の弟……なんだけど」

冴理「まあ、だろうなとは思ってた」

啞然とする玄。

甲斐が休憩室を覗く。

甲斐「あ、栗田こんなところに居たのかよ」

玄、冴理、天和が甲斐を見る。

甲斐も玄、天和、冴理を見る。

甲斐「……何してんの？」

4人の間に沈黙が流れる。

甲斐「……会議、始めたいんだけど」

玄「……はい。すいません今行きます」

早足で休憩室を出ていく玄と甲斐。

出ていく玄の背中を見送る天和。緊張

が解けたように肩の力が抜ける。

冴理「天和君も、部屋案内するね」

天和「……はい」

○イタリアン居酒屋・外観（夜）

客たちの談笑する声。

○同・店内（夜）

玄、冴理、甲斐、梅原がテーブル席で

食事をしている。

梅原「本当に何も聞いてなかったんですか？」

冴理「一緒に住んでるんじゃないっけ？」

玄「……何も聞いてない」

玄、店員を呼ぶ。

玄「すみません、ビールもう一つ」

近くを通りかかった居酒屋店員（25）

が元気よく返事をする。

居酒屋店員「はーい！」

残り少ないビールを飲み干す玄。

梅原「でも天和君が同じ会社受ける時点で、

栗田さん良いお兄ちゃんなんでしょうね」

甲斐「にしても俺弟と同じ職場は嫌だな……」

玄「俺だってどんな顔したらいいかわかんない

っすよ」

冴理「でも結局グループ採用だから実際働く

のは別の会社かもよ。インターンをうちで

引き受けてるっただけだし」

冴理の言葉を聞いて少し考える玄。

玄「まあそれだったら……いや、でもな」

甲斐、感慨深い様子で。

甲斐「とうとううちもインターンとかやるよ

うになったのか」

ぐびっとビールを飲む甲斐。

冴理「親会社の人事が、毎年各社持ち回り制

で入社前インターン開催したいって、数年

前から進めてて。うちでは今年が初開催で

す。一応編集部の代表としては私が」

梅原「各班一人以上は参加して欲しいって話になってエンタメ班からは僕が出てます」

玄「ってか、インターンって何するの？」

玄と甲斐に説明をする冴理。

鞆からタブレットを取り出す梅原。

冴理「3人ずつのグループを組んでテーマ決め、調査とか取材とか進めて……で、最終的には一つの記事を書いてもらう。まあみんな大学の合間見てやってもらうから簡単なものにはなるけど」

自慢げにタブレット画面の企画書を玄にみせる梅原。

梅原「八南さんに協力してもらって僕が企画書を作りました」

玄「へえ……」

居酒屋店員がビールを持ってくる。

居酒屋店員「お待たせしました生ビールです」
玄「ありがとうございます」

玄、空のジョッキと居酒屋店員の持つ

ビールジョッキを交換する。

甲斐「でも俺、栗田の弟初めて見たわ。なんか爽やか好青年って感じ」

梅原、自分の向かいの席に座る玄の前にタブレットを上げ、天和の証明写真と玄の顔を見比べる。

梅原「雰囲気は割と違いますけど、顔は似てますよね」

梅原の隣に座る甲斐、タブレット画面と玄を見比べている。

甲斐「確かに」

玄、梅原の方に手を伸ばす。

玄「それ見せて」

梅原、玄にタブレットを渡す。

タブレットで天和の選考資料を見ていく玄。隣の席の冴理もそれを覗く。

冴理「これ本当はインターンの担当者以外見ちゃいけないやつなんだけどね……」

玄、タブレットをスクロールしていく。

甲斐「まあいきなり会社で弟と遭遇したらビ

ビるよな（笑）」

玄「本当、何で黙ってたんすかね……」

突然、スクロールする手が止まる玄。

玄「え……何これ、『課題記事』？」

冴理「インターン参加者を選考するときの課題。インターンのグループワークで書いてもらう記事もこれの延長みたいなイメージ」

タブレット画面には『雑居ビル火災の危険性について』とタイトルが書かれた記事。

玄「これ……」

冴理「天和君、自分が巻き込まれた火事のことも少し書いてたよ」

記事の一部に『足立区城山ビル火災について』という文字。

記事を見て眉間に皺を寄せる玄。

梅原「その火事って、電線トラブルによる事故って結論でしたっけ？」

甲斐「確かそうだったはず」

○（回想）雑居ビル火災現場・3階（タ）

建物内が燃える中、意識を失った天和を抱きかかえている玄。

梅原の声「栗田さん、ビルに残った天和君を助けに行っただすよね……」

○（回想）同・建物外（タ）

ビルの中から天和を抱えた玄が出てくる。

梅原の声「当時の記事見たことありますけど、どこも栗田さんをヒーローみたい」

玄、意識を失っている天和を下ろし、その後玄自身も意識を失い倒れる。

甲斐の声「弟にとっては命の恩人だからな」

○元のイタリアン居酒屋・店内（夜）

テーブル席で飲み会中の玄、冴理、甲斐、梅原。

甲斐「でもまあ。この火災、不自然なところが多いらしいね」

梅原「なんかブラックボックス感ありますよね。名前……出てこないっすけど、少し前に亡くなった有名なジャーナリスト、この火事のこと調べてたって噂ですよ」

冴理がふと顔を上げると、玄は青ざめた表情で記事に視線を落としている。

玄に声をかける冴理。

冴理「栗田？」

玄、我に帰る。

玄「え？」

冴理「大丈夫……？」

動揺している様子の玄。

甲斐と梅原も玄を気にして、

甲斐「悪い、栗田の前でする話じゃないな」

梅原「……すみません無神経に」

玄「いや、……全然、大丈夫なんです。これありがとう」

タブレットを梅原に返し立ち上がる玄。

梅原「あ、はい……」

玄「ごめん、ちょっとトイレ」

立ち去る玄。

○同・店の外（夜）

店から出てくる甲斐、梅原。

梅原「ごちそうさまでしたー！」

甲斐「さ、帰るか」

玄と冴理も店から出てくる。

玄「お疲れ様でした」

甲斐「お疲れ」

梅原「お疲れ様です！」

先に二人で歩き始める梅原と甲斐。

玄「俺こつちだから、じゃあ」

梅原と甲斐が向かった反対側を指す玄。

冴理「うん」

一人で歩いていく玄。

しばらくその背中を見送る冴理。

先を歩く梅原が冴理の方を振り返る。

梅原「八南さん？」

梅原の声に気付き振り返る冴理。

冴理「はい、今行く」